



『私の忘れもの』

第26号

H21.9.24



☆認知症になった方へのかかわり方・・・場所が異なると行動も変わる

認知症を発症すると新しい場所への対応も困難になってきます。二人の娘さんのお宅を行き来して過ごしておられたある女性は、長女のお宅では娘さんと一緒に台所に立ち、出来ることを手伝いながら楽しそうに過ごされます。しかし、次女のお宅では、台所で手伝うことも無く、あまり楽しくない不平や不満をよく話され、笑われることもほとんどありません。その違いに気付いた次女は「お母さんは私よりお姉さんの所の方が居心地が良いのだ、私といるときは楽しくないのだ・・・」と考えるようになりました。

しかし、そうではなく長女のお宅の台所は、認知症を発症する前からのままですが、次女のお宅の台所は認知症発症後に改装されて、すっかり様子が変わっていたのです。なじみのない次女の台所では、自分の居心地の良い場所を見つけることが出来ず、話す内容も自身の気持ちも自然と暗い方向に向かっていたものと思われます。同じ娘の台所という場所であっても、ご本人にとっては全く異なった空間と認知されているということです。なぜそうした異なった言動となるのかを正しく判断するには、認知症に対する正しい知識と理解、冷静な判断が必要となり、なかなか困難なことです。
(松尾 記)

☆認知症の種類・・・アルツハイマー型（原因と症状）

<原因> 認知症全体の34%を占めるといわれる（東京都健康長寿医療センターの研究発表）アルツハイマー型認知症も、何が原因で発症するのか、まだはっきりと解明されていません。

アルツハイマー型認知症は、脳に悪玉たんぱく質（ベーターアミロイドたんぱく質）が蓄積し、老人斑というシミのようなものが出来ます。その結果神経細胞が減少し、脳の機能が失われていきます。こうした現象は、早い人では40代から始まっているといわれ、健康な人の脳にも見られる現象です。神経細胞の減少により、脳も萎縮すると言われてています。

<症状>アルツハイマー型認知症の症状は、物忘れ（最近のことを忘れる）という形で発症し、確実に進行するのが特徴ですが、進行する速さ（数年から十数年）は個人差があります。こうした症状に続いて、時間や場所がわからなくなるという症状が現れ、判断力や思考力、理解力などの低下も見られるようになります。こうした症状が進行していくと、さまざまな環境の影響なども受け、徘徊・妄想・幻覚といった症状が現れることがあります。これらは環境が整うことで解消されるとも言われています。

☆サインを見逃さずに

今回は「アルツハイマー型認知症」に見られる事前のサインについてお伝えします。近年の研究によって認知症を発症する前（概ね7～8年前）に特徴的に現れる認知機能の低下がわかっています。大きく分けて3つに分類されていますが、そのひとつが「**注意分割機能**」と呼ばれるものです。簡単に言えば**同時に複数の事を処理する能力**の事です。この能力が衰えた事を普段の生活の中で「おかしいな」と気づく事はかなり難しいことだと思います。

しかし、2つの事を一緒に処理するのが不自由になることで現れる顕著な例として、病院から複数の薬を処方された場合を考えてみてください。薬の全部が**食後**に服用なら何の問題もありませんが、1種だけ条件が違う（例えば**食間**や**朝だけ**）だと大多数の対象者が混乱して、正しい対応（どのように薬を飲んだら良いか）が出来なくなります。

処理しなくては行けない与えられた課題が、本人にとっては今までに無く複雑になる事で、負担だけが増幅して余裕が失われるためではないかと思われます。事前の発症発見の大きなサインだと思われます。

『私の忘れもの』は、「福祉のまちづくりパートナーシップ区民活動支援事業」の助成をうけて印刷されています。

お問い合わせは「白い箱の会」事務局（松尾方 TEL:FAX 3998-9006）まで。